

1 伝説時代の君主たち——政権が続くかは天命次第

易姓革命

存在が確実な最古の中国国家は殷です。殷の君主は王であり、当時はまだ皇帝はいませんでした。殷は紀元前1000年ころに周という国によって滅ぼされ、今度は周が中国を支配するようになります。周の君主も王であって、やはり皇帝ではありません。中国に皇帝が登場するのは、まだまだ先、紀元前3世紀のことで、これは後述します。しかし、中国に皇帝が現れる以前にも、すでに中国には唯一無二の最高君主の称号が存在しました。天子がそれです。天子は天の「子」であって、羽の生えた子供の姿で描かれる天使（エンジェル）とはまったくの別物です。

中国の最高君主は古代からずっと天子を称していました。したがって、のちの皇帝も、殷・周の王たちも同時に天子でもありました。中国では最高君主による支配の正当性を以下のように理屈づけて説明します。君主は天の神である天帝から世界を支配せよとの命令すなわち「天命」を受けている天の子つまり天子であるとされます。しかし、それは君主が徳をもって人々を統治している限りのことであって、君主が徳を失って人々の心が離れてしまったら、天命も

失って君主は世界の支配権を喪失します。天帝は徳を失った君主を見限り、別の人物に天命を与え、世界を支配するように命じます。こうして天命を失った君主は、君主としての地位から引退し、新たな人物が天命を受けて君主になって政権交代が起こります。

殷の王家は「子」を姓とし、その一族が代々王位を継承していきました。天命が子一族に下っていたのです。ところが、子受、一般に紂王とよばれる王の治世にいたって政治が乱れたので、天帝は紂王から支配権を取り上げ、新たに姫発なる人物に天命を下します。姫発は紀元前1027年に牧野の戦いで紂王を破って殷を滅ぼし、周を建国します。姫発が周の初代王にして天子である武王です。殷から周への中国王朝交代劇を殷周革命といえます。「革命」とは、「命を革む」、つまり天命が革まることを意味しています。こんにち私たちが英語のレボリューションの訳語として用いる革命という語とは微妙な差異があります。「革命」による王朝交代を理論化したのが、周代後半期に生きた思

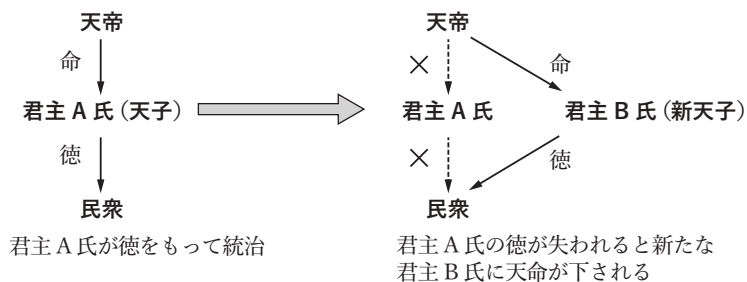


図1-1 易姓革命 天帝の命が移ることで支配氏族の交代が起こる。

思想家の孟子で、彼の理論を易姓革命論といいます（図1-1）。「易姓」とは「姓を易う」、すなわち中国の支配者一族の姓が易わることを意味しています。天命が殷の子を姓とする一族から周の姫を姓とする一族へ移ったことを指しています。この易姓革命の考え方にもとづいて、以後、中国の政権交代は説明され、このような考え方は少なからず今も中国の人々の深層心理に刻まれているはずです。

三皇五帝

以上に紹介した内容は、はるかのことになって書かれた『史記』などの歴史書の記事によるもので、これがどこまで史実であったかは定かではありません。しかし、殷という国と周という国があつて王朝交代が起こったことは否定できない事実です。『史記』は紀元前1世紀、漢という国の統治期に成立した歴史書で、『史記』を始めとする古い歴史書には殷成立以前の君主たちの存在も伝えられています。考古学的な裏づけに乏しい、あくまで伝説時代の君主たちです。

殷の前には夏という国があつて、これが最初の「中国」だとされています。夏建国以前にも伝説上の君主たちがいたことが文献には記録されていて、彼らは三皇五帝と総称され、3人の皇と5人の帝の合計8人が中国の伝説的な統治者としてカウントされています。もともと、誰

を三皇五帝に数えるかは歴史資料によって違いがありますが、最後の2人は堯、次いで舜とおおむね一致しています。この2代の治世は、とりわけ平和で豊かな時代であり、彼らは理想の聖人君主とみなされています。堯は部下のなかでもとくに徳の高い優秀な人物である舜を後継者を選んで君主の地位を譲りました。このような平和的な君主の交代を禪譲といつて、易姓革命論において理想的な政権交代のあり方であるとされています。

舜はさらに部下の禹に禪譲します。しかし禹の死後、彼の息子が王位を継承し、以後王位が世襲されるようになります。こうして禹を初代の王とする中国初の王朝である夏が成立しました。しかし夏の最後の王である桀の治世にはすっかり統治が乱れたため、紀元前1600年ころに殷の湯王の軍によって夏は滅ぼされ、夏から殷への政権交代が起こりました。のちの殷から周への交代と同様の武力による王位奪取で、このような暴力を用いた政権交代を放伐といいます。放伐は、理想的な政権交代である禪譲と並んで中国における政権交代のパターンの一つとされています。

ところで夏という国名ですが、これは今では同じ音の漢字を用いて「華」と書かれます。中華の華のことです。古い文献では中華も「中夏」と表記されていました。前近代における中国の文語である漢文では「夏」という単語は特定の国を指すのではなく「中国」を意味する一般名詞です。つまり伝説上の最初の中国国家の国名「夏」とは、そのものずばり「中国」であつ

1 ユスティニアヌス——生きのびる東ローマ帝国

地中海世界の再征服

時間を少しくさかのぼって、イスラーム教が誕生する以前、ヨーロッパ地域に話を戻します。西ローマ帝国が476年に滅亡して、ローマ皇帝は再び東ローマ皇帝ただ一人になりました。東ローマ帝国は、現在のギリシアなどの国のあるバルカン半島からトルコのある地域までのあたりを中心とする国で、イスラーム教徒たちに奪われるまではシリアからエジプトにかけての地中海東岸も領有していました。東ローマ帝国は6世紀に入って最盛期を迎えます。ときの東ローマ皇帝はユスティニアヌスです。

当時、西ローマ帝国旧領である西ヨーロッパと北アフリカには、ゲルマン人の諸国がひしめいていました。西ローマ帝国の中心地だったイタリア半島には、東ゴート王国、フランスにはフランク王国、イベリア半島に西ゴート王国、北アフリカにヴァンダル王国が割拠していました。東ローマ皇帝ユスティニアヌスは、これらゲルマン人の国々を屈服させて、かつての西ローマ帝国の領域を接収しようと、野心を抱きます。ときの東ローマ帝国にとって最大のライバルだったのは、その東隣りで国境を接しているササン朝ペルシアでした。



図4-1 ユスティニアヌス 旧西ローマ帝国領の一部を回復して一時的に地中海全域の覇権を回復した。

ササン朝ペルシアはイラン地域を占めるイラン人の国で、東ローマ帝国と何度も会戦を繰り返して、現在のイラクのあたりを境に両国は一進一退の攻防を重ねていました。勝敗が決しないまま東ローマ帝国はササン朝ペルシアとの戦いに莫大な戦力を割かざるをえませんでした。ユスティニアヌスは東方の安全を確保すべく、ササン朝ペルシアとの休戦協定の締結を果たします。戦争に疲弊していたのはササン朝ペルシアも同様だったので、両者の意向が一致したわけです。最大の外圧を払拭したユスティニアヌスは、いよいよ旧西ローマ帝国領の併呑、東西ローマ世界の再統一をめざして軍事行動を開始します。

ユスティニアヌスは北アフリカのヴァンダル王国を滅ぼして、この地を併せます。ついでイタリア半島を陣取っていた東ゴート王国をも滅ぼして、ローマ帝国発祥の地であるイタリア半島を占領します。さらに西ゴート王国のあるイベリア半島へも遠征し、西ゴート王国については滅ぼすにはいたりませんでした。が、イベリア半島南部の一角を占領することに成功しました。こうして、ユスティニアヌスは地中海を取り囲む領域の再現に成功しました(図4-2)。

もつとも、それはかつての統一ローマ時代の領域に遠くおよばないほど狭いものでした。地中海周縁の領土を回復したとはいっても、その西ローマ世界における占有地は、おおむね沿岸部に限られていました。それでも東ローマ帝国は地中海世界の覇者へと再び咲き、地中海をみずからの内なる海、つまり内海ないかいとすることによって成功して地中海の制海権を掌握したのです。ユスティニアヌスの再征服戦争は十分に統一ローマ帝国の再現に値する偉業だったといつてよいでしょう。

皇帝教皇主義

東ローマ皇帝ユスティニアヌスは地中海世界を征服して、統一ローマ帝国を領域面で再現するのみならず、文化・経済の振興をもめざしました。古代から発布されてきた数々の法を体系的に整理して集成し、『ローマ法大全たいぜん』を完成させています。東方から輸入していた中国特産の絹織物を国産化しようと、絹の原料を生み出す蚕かいこの卵を密輸して絹の国内生産を実現しました。

ユスティニアヌスは宗教面の興隆をも図ります。壮麗な教会建築やイコンとよばれるイエスやイエスの母マリアの聖像が盛んに作られ、キリスト教美術が花開きます。ユスティニアヌスは東ローマ帝国の教会である正教会せいきょうかいを保護しつつも、これに対する統制を強めました。東ローマ皇帝と正教会の総主教そうしゅきょうの関係を皇帝教皇主義とよぶことがあります。東ローマ帝国では、皇帝がローマ・カトリック教会の教皇にあたる総主教に対して優位に立ち、東ローマ皇帝が積極的に宗教政策に介入できました。皇帝が「教皇」としてふるまうことによって宗教上の主導権を総主教から奪っている状態、つまり皇帝が政治と宗教の双方の主催者となっていたことを皇帝教皇主義と言います。

もちろん、ときには東ローマ皇帝と総主教との関係は対立的になることもありましたが、そのため、専制権力で正教会を抑え込んでいたようなイメージを抱かせる皇帝教皇主義という語の使用は最近では忌避される傾向にあります。とはいえ、**皇帝の意向によって正教会の運営が左右される場面が、比較的多かったことは確かです**。後述するように、のちに西ヨーロッパ世界で西ローマ皇帝が復活します。ところが復活した西ローマ皇帝と、西ローマ世界の教会であるローマ・カトリック教会の教皇は、まもなく恒常的に対立するようになり、このことは西ヨーロッパ世界における深刻な問題となります。その一方で東ローマ皇帝が正教会に深く関与できた東ローマ帝国は、宗教面で西ローマ世界と明確に異なる様相を示していたのです。



図4-2 ユスティニアヌスの時代の東ローマ帝国 — 一時的ながらも地中海世界の制覇を果たした。

4 オットー1世——神聖ローマ帝国の誕生

神聖ローマ帝国

10世紀の初頭には西ローマ皇帝の継承者が途絶えて、再び西ローマ皇帝位が空位となりました。イタリアを支配していた中部フランク王国でも、ドイツを領域としていた東フランク王国でも、すでに王家カロリング家が断絶していて、西フランク王国でのみカロリング家の支配が続いていました。やがて中部フランク王国は実態を失います。東フランク王国では王が有力貴族のなかから選ばれるようになりました。東フランク王国の有力貴族たちのなかから台頭してくるのがザクセン家です。かつてカール1世に征服された異教徒のゲルマン人を統括していた一族です。そのザクセン家が東フランク王の位につき、ザクセン家の2代目東フランク王となったのが本節の主役であるオットー1世です。



図4-6 オットー1世 西ローマ皇帝位につき、神聖ローマ帝国を創建した。

東フランク王オットー1世は国内支配の安定に努めるとともに、対外戦争でもめざましい成果を上げました。東方のスラヴ人、ロシア人やポーランド人・チェコ人などの祖先を討伐し、東方から進入してきた騎馬遊牧民族のマジャール人も撃退します。マジャール人はこんにちのハンガリー人の祖先で、その後、現在のハンガリーの地に定着します。やがてマジャール人たちはキリスト教のローマ・カトリックを受容してハンガリー王国を建て、西ローマ世界の構成メンバーになっていきます。

東フランク王オットー1世は962年、ローマ教皇ヨハネス12世の手から西ローマ皇帝の帝冠を授かります。こうしてオットー1世はしばらく不在だった西ローマ皇帝を復活させました。これ以降の東フランク王国は一般的に神聖ローマ帝国とよばれています。キリスト教の理念によって支えられた神聖なる帝国の意味です。神聖ローマ帝国の君主は皇帝位とともにドイツ王の位をも併せて称するのが通例です。したがって神聖ローマ帝国はドイツ



図4-7 神聖ローマ帝国の領域 こんにちのドイツを中心に東欧の一部やイタリアまでを領有したが、実態は無数の独立諸侯の国々からなる連合体だった。

1 テムジン——チンギスⅡカンはカーンになった

テムジンの登場

1206年、モンゴル高原の片隅を流れるオノン川のほとりで、のちに世界征服を果たすモンゴルの君主に、テムジンなる人物が推戴されました。彼こそがチンギスⅡカンその人です。モンゴルは、こんにちのモンゴル国のあるモンゴル高原の弱小部族でしたが、テムジンの即位に先立って周囲のライバル部族を次々と撃破し、一大勢力へと成長します。やがてモンゴル高原を統一し、正式にテムジンは君主のカンに即位してチンギスⅡカンを称するようになります。

モンゴル高原は全域が草原で覆われています。草原では雨量が少なく農業ができません。そこに住む人々は羊などの家畜を飼育して乳製品を主な食料とし、羊の毛で住居の壁材や衣服を作って生活をしています。季節ごとに



図5-1 テムジン チンギスⅡカンとして知られる彼の登場によってモンゴルは世界征服への道を歩むことになる。

羊の群れを引き連れて移動する遊牧という生活形態をとり、膨大な数の羊を統御するために馬に乗るので、老若男女を問わず騎馬技術を身につけています。彼らのように馬を使用して遊牧をする人々を騎馬遊牧民といいます。騎馬技術は容易に軍事に転用できるので、騎馬遊牧民は誰もが物心つくころには戦士になっています。モンゴル高原には主にモンゴル系・トルコ系の騎馬遊牧民が部族国家をつくって割拠していました。ときにカリスマ的な軍事指導者が登場すると、一気に諸部族がまとめあげられて大統一国家が建設されます。モンゴルもそんな騎馬遊牧国家の一つでした。

モンゴル高原の騎馬遊牧民の国は部族連合国家の体制をとります。複数の部族が連合体を構成し、政治は部族長たちが一堂に会する部族長会議で決定されます。君主の即位を承認するのも、この部族長会議です。モンゴルの部族長会議をクリルタイといい、このクリルタイを開いて部族長たちの承認を得さえすれば、モンゴルの君主として即位できます。

「大カーン」号の使用開始

もともと、モンゴルはタタールとよばれる部族連合体を構成する一小部族だったようです。チンギスⅡカン、つまりテムジンは即位以前にタタール部族連合体の主導権獲得に成功しています。そのためか、モンゴルは別名でタタールとよばれることもあります。タタール部族連合

3 ピョートル1世

——モスクワ大公国は「東ローマ帝国」になった

海洋への進出に向けて

モスクワ大公国は16世紀末までにロシア地域からユーラシア大陸の北東部シベリアにいたる広大な領域を支配するまでに成長しました。しかしまもなくモスクワ大公家が途絶え、モスクワ大公国は一時、混乱の時期を迎えます。この混乱は、1613年にロマノフ家の人物がモスクワ大公かつ皇帝ツァーリに即位することで收拾され、ここにロマノフ朝モスクワ大公国が創始されました。ロマノフ朝は1917年に起こるロシア革命で倒れるまで続くことになります。

モスクワ大公国はさらに東方へと進出し、17世紀末の段階でユーラシア大陸の東端に達してオホーツク海を臨むようになります。オホーツク海の南には日本列島がひかえています。またモスクワ大公国は、当時、モンゴル高原と中国を支配していた清と国境を接するようにもなりました。清は本章最後の節で後述するように、元・明を統合して成立した中国国家です。

17世紀末より、ピョートル1世が君主としてモスクワ大公国に君臨するようになります。彼のみずから西ヨーロッパ諸国に向いて視察し、ときに急速に近代化を遂げていた西ヨーロッパ

世界を自身の目でつぶさに観察しました。帰国したピョートル1世は西ヨーロッパ諸国を本とする国制改革を実施して軍事力を増強し、さらなる領域拡張を図ります。

内陸国家として出発したモスクワ大公国は、ピョートル1世の治世に海洋への出口を確保するにいたります。モスクワ大公国の南方にあるウクライナ地域は、オスマン朝の勢力下におかれていました。オスマン朝は東ローマ帝国を滅ぼしてその地を併合し、その君主はカリフを称してイスラーム世界の覇権を握っていました。ピョートル1世はオスマン朝軍を撃破すると黒海東北の一部を獲得し、ここに海軍を設置することに成功します。さらにピョートル1世は西ヨーロッパ世界への領土拡張も試みます。

モスクワ大公国と西側で接していたポーランドへの進出をめぐって北欧のスウェーデンと対立し、1700年より両国は全面戦争に突入しました。この戦争を北方戦争といえます。

北方戦争の過程で、モスクワ大公国のピョートル1世は、スウェーデンからバルト海沿岸地域を奪い、ここに大規模な港町



図7-4 ピョートル1世 ツァーリに加えてインペラトルも称し、モスクワ大公国をロシア帝国へと発展させた。

4 洪武帝と永楽帝——モンゴル海洋ネットワークの継承

冊封体制の復旧

元は中国で勃発した農民反乱に対処できず、モンゴル高原の草原地帯へと撤退してしまいました。紅巾の乱の指導者の一人だった朱元璋なる人物は、元勢力を草原地帯へと追いやると、1368年に皇帝に即位して明を建国し、元に代わって中国を支配するようになりました。皇帝となった朱元璋は洪武帝とよばれるようになります。明はその勃興の地が中国南部の長江流域だったことから、長江下流の都市南京を首都に決めました。

明の洪武帝は、元による自由貿易推奨策を改め、伝統的な「中国」の外交政策である冊封体制を復活させます。冊封体制とは、先述の通り中国皇帝を頂点とする東アジア世界の国際的な政治・経済秩序です。外国の君主を中国皇帝の臣下とし、中国皇帝は外国君主とのあいだに君臣関係を築きます。臣下となった外国君主には主君である中国皇帝に朝貢する義務が生じ、中国皇帝は外国君主の朝貢に対して返礼品を贈ります。こうすることで貿易が成立します。冊封体制のもとでは国家間の朝貢貿易のみが認められ、民間商人による自由な商業取引引きは原則として禁止されています。

ところが国家間交易のみを認める朝貢貿易体

制への急な回帰は、これまでモンゴルによる支配のもと、海上交易で自由に商売を行ってきた交易商人たちからの反発を引き起こすことになりました。商人たちは正規の朝貢貿易を無視して密貿易を展開するようになります。元から明へと中国の支配者が交代したことで政治的混乱に拍車がかかり海上秩序が失われます。密貿易商人たちは自衛のために武装するようになり、しばしば海賊行為におよぶようになりました。このような海賊集団を倭寇といいます。「倭」というのは日本のことです。元の時代に自由貿易で活躍していた日本人商人たちの多くが密貿易・海賊行為に関わるようになったために、この名でよばれたのです。冊封体制を再建し伝統的な中国世界秩序を回復するうえで、倭寇対策は明にとって最大の課題になります。



図7-5 洪武帝 元のモンゴル人を中国から追い出し、漢民族の「中国」を復興させた。

鄭和の南海遠征

洪武帝は伝統的な封建制度を実施し、子どもたちを中心に彼らを王などの諸侯に封建して地

18世紀末、中国世界の清、東ヨーロッパ世界のロシア帝国、イスラーム世界のオスマン朝は、その君主が大カーンとなりモンゴルたることをめざしてユーラシア大陸を席卷していました。そこに忽然と殴り込みをかけてきたのが西ヨーロッパ諸国です。彼らは「モンゴル」ではなく、「自由」と「平等」というまったく異なる理念を掲げて世界覇権競争に参入してきました。爆発的に進歩を遂げた軍事技術と航海技術をふりかざし、ここに西ヨーロッパの逆襲が始まります。

2 ——ナポレオンとフランツ1世 ——ローマ皇帝は世界を支配しない

フランス革命

1792年、フランス革命が進行するなか、フランスで王政が倒れてフランスは共和政に移行しました。民衆の力によって政権が転覆したフランス革命は、ヨーロッパ中の国々に衝撃を与えます。ヨーロッパの国々はフランス革命の影響が自国におよんでフランス同様の民衆による政治運動が起こることを警戒し、団結してフランス革命を封じ込めようと軍事同盟を結びま

す。フランス革命政府は全ヨーロッパの国々を相手に戦わなくてはならなくなりました。革命で内政が混乱しているフランスでしたが、フランス人兵士は勇猛果敢に戦います。

フランス兵を駆り立てたのは「自由」と「平等」、そして、そこから発展した自由主義と国民主義という新しい理念でした。自由主義は自由を至上の価値とみなす考え方です。国民主義とは、みずからが○○人であるという明確なアイデンティティを共有する集団感覚です。従来、ヨーロッパに限らず、世界中のあらゆる人々には自分が○○人であるとか○○民族に属するといった発想がありませんでした。ところが西ヨーロッパで主権国家体制が構築されて国境が明確になると、人々は国籍や民族を意識するようになります。フランス軍が「祖国フランスを守るため」に民族意識を昂揚させて「フランス人」を称揚して戦うさまは、対するヨーロッパ諸国の兵士たちにも自分が○○人であるという意識を惹起させました。フランスによる革命戦争を通して国民主義がヨーロッパ全域に拡がり、このとき初めてドイツ人、イギリス人など、各国の人々が「国民」を自覚するようになったのです。

フランス革命に端を発する革命戦争のなかで頭角をあらわしたのが軍人のナポレオンでした。ナポレオンは軍事的成果を上げることでフランス国民の人気を獲得し、1799年に大統領職に就任します。さらにナポレオンは1804年、国民投票で皇帝に選ばれ、ローマ教皇から皇帝の冠を受けて即位しました。ナポレオンの即位した皇帝とは、まぎれもなく西ローマ皇帝で

す。国民による承認を受けたことは古代ローマ共和政の原理に、ローマ教皇からの戴冠を受けたことは中世西ローマ皇帝の即位形式に、擬することができるとしよう。

ナポレオンが西ローマ皇帝に即位することで、西ローマ皇帝が2人になってしまいました。フランスのナポレオンと、ときの神聖ローマ皇帝フランツ2世です。この異常事態にあつてフランツ2世はロシア皇帝すなわち東ローマ皇帝のアレクサンドル1世と協力してナポレオン率いるフランス軍と戦います。なお神聖ローマ皇帝位はオーストリア公国の君主が継承していたので、フランツ2世は神聖ローマ皇帝かつオーストリア公でした。1805年、ローマ皇帝3人が同じ戦場で会することになったアウステルリッツの戦いは、オーストリア公国・ロシア帝国連合軍の惜敗に終わります。単なる国の集合体になりさがっていた神聖ローマ帝国は、解体されて神聖ローマ皇帝ともども消滅し、フランスのナポレオンが唯一の西ローマ皇帝になりました。



図8-1 ナポレオン 神聖ローマ帝国を滅ぼし、唯一の西ローマ皇帝としての地位を獲得した。

オーストリア皇帝

オーストリア公フランツ2世は、神聖ローマ皇帝の位をナポレオンに剝奪されて以降もオーストリア皇帝を称し続けました。神聖ローマ皇帝フランツ2世は、初代オーストリア皇帝としてはフランツ1世とよばれています。

西ローマ皇帝でも東ローマ皇帝でもない、オーストリア皇帝とはどのような地位なのでしょう。オーストリア皇帝の登場を皮切りに西ヨーロッパの国々とその植民地には○○皇帝などという特定の国名を冠した皇帝が複数出現するようになります。よくナポレオンが皇帝を称したことによって皇帝の価値が下がったため、複数の皇帝が乱立するようになってしまったと説明されることがあります。本当に皇帝の価値や性格がナポレオンの皇帝即位によって変化したのでしょうか。

そもそも、ローマ皇帝の称号インペラトルとは、古代ローマにおいて一定の領域への命令権インペリウムを持つ者が帯びる軍司令官の称でした。歴代ローマ皇帝はローマ帝国全土に対する命令権（インペリウム）を持って



図8-2 フランツ1世 オーストリア皇帝を称し、「国民国家の皇帝」登場の端緒を開いた。

生活を送っていたのですが、ロシア共和国とドイツ帝国が単独講和におよんだ数ヵ月後、一家ともども銃殺刑に処せられてしまいました。

5 ヴィルヘルム2世 ——ドイツ革命、西ローマ皇帝の断絶

ドイツ帝国の反撃

第一次世界大戦を始めたドイツ皇帝は、3代目のヴィルヘルム2世です。第一次世界大戦を短期決戦で終える計画を立てていたドイツ帝国でしたが、フランスとロシア帝国を東西両面で相手にすることになり、予定外の長期戦を強いられるようになりました。戦争はこれまでになく消耗戦になり、国民生活のすべてが戦争に費やされ、ドイツ帝国は次第に疲弊していききます。前節で紹介したロシア帝国と同じく、ドイツでも食糧事情が悪くなり、労働者のストライキや反戦運動が盛んになっていきます。

そんな折にロシア帝国で革命が勃発してロシア帝国が崩壊し、ロシア共和国が誕生しました。前述の通りドイツ帝国はロシア共和国内部の動揺を誘うため、ロシア新政府と対立していた社

会主義革命家レーニンのロシア帰国を支援します。その後、彼の活躍によって史上初の社会主義国家ソ連が誕生する道が開けました。そしてドイツ帝国はロシア共和国との戦いを停止させることに成功します。

しかし、このドイツ帝国の策謀は裏目に出ます。万人の経済的平等の実現や社会の最貧民層の救済を目標とするロシア共和国における社会主義革命の成功は、ドイツ帝国で困窮していた労働者たちを勇気づけ、かえってドイツ国内の反政府運動を加熱させてしまったのです。まもなくドイツ帝国も革命の嵐に見舞われることになります。

ドイツ帝国はロシア共和国との単独講和を実現し、東面での戦線に終止符を打ちました。起死回生とばかりに全戦力を西側、フランス・イギリスとの戦いに振り向けます。しかし、物量で圧倒するフランス・イギリスをはじめとする連合国軍の前に、ドイツ帝国は劣勢を覆すにいたりませんでした。苦しさ



図9-7 ヴィルヘルム2世 彼は即位するや国際社会をうまく操作していた宰相のビスマルクを引退させて親政を始め、積極的な対外進出を展開して第一次世界大戦を引き起こした。しかしドイツ帝国にはイギリスやフランスと戦う体力はなく、ドイツ革命を誘発してしまった。